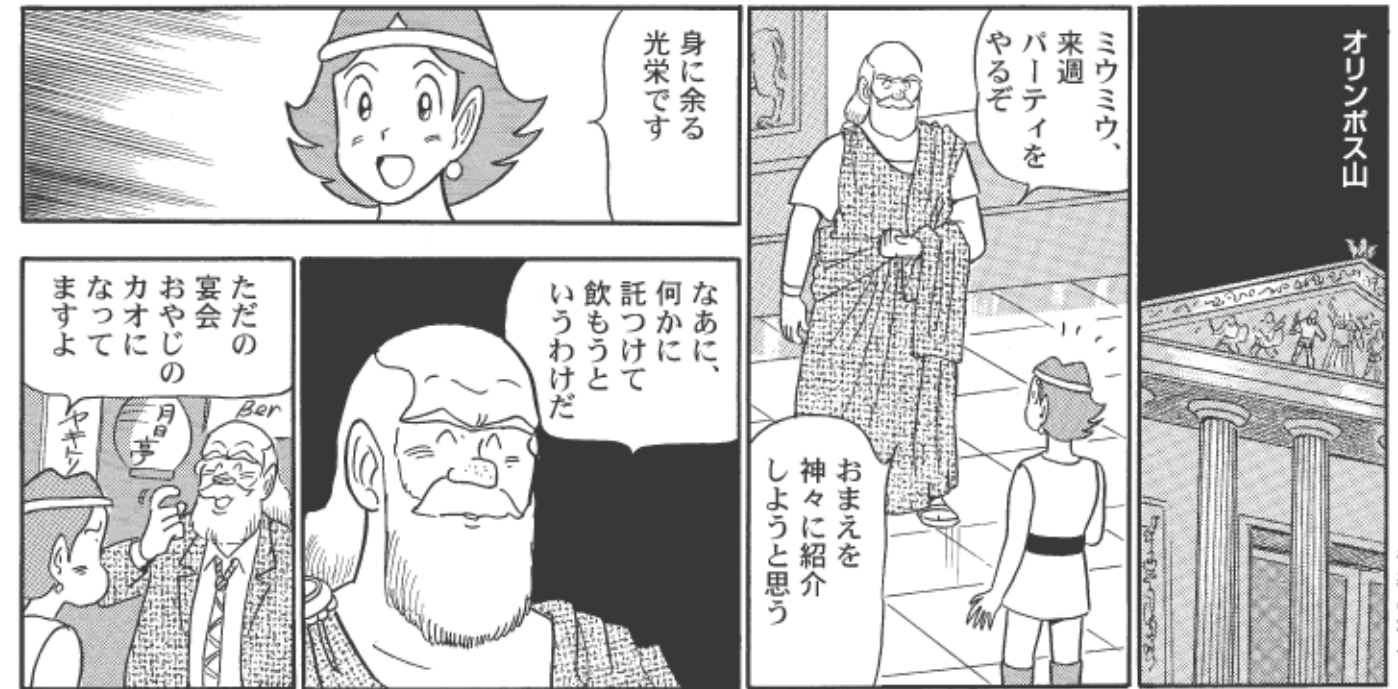


No. 037
金井三男のこだわり星座神話
カルピスとアクエリアス

ギリシャ語では、水瓶のことをヒュドリアまたはカルピスという。みずがめ座の学名は、Aquarius (アクエリアス)。清涼飲料水にも同名のものがあるが、直接的に「水そのもの」をさしておらず、瓶の意味を持つわけではない。なお、清涼飲料水といえば「カルピス(商品名)」があるが、その場合のカルピスがカルシウムを豊富に含む乳飲料という意味で命名されたものであるらしいので、同じ発音で同じつづりだが直接の関係はない。



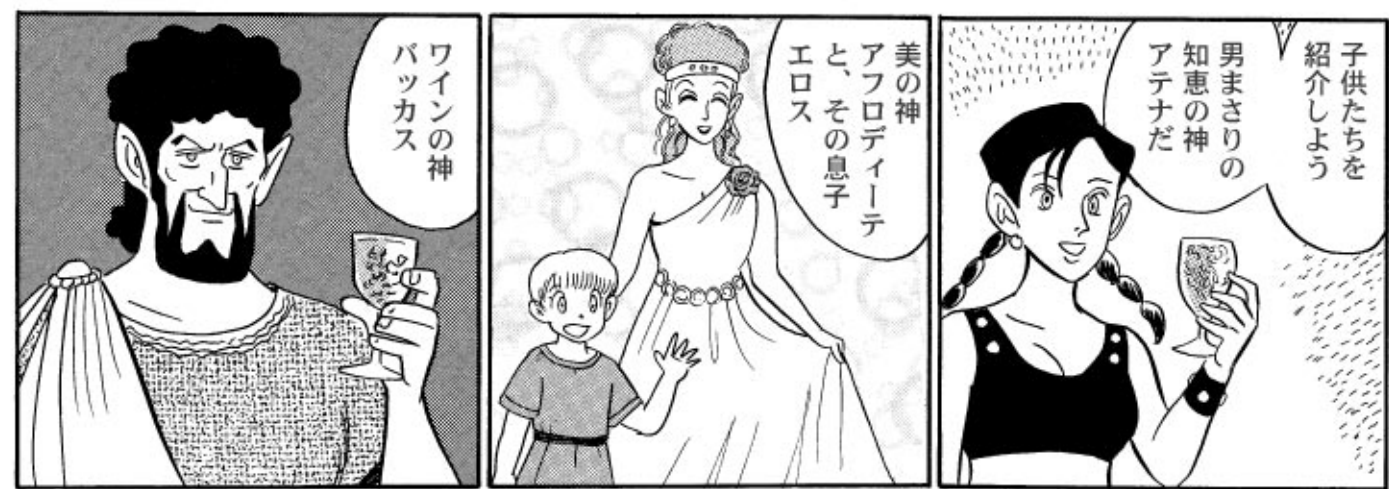
No. 036
金井三男のこだわり星座神話
ネクターを注ぐ美少年

みずがめ座の瓶はギリシャ人が好んで飲んだネクター(甘い葡萄酒)の水割りを入れる瓶で、大鷲(わし座)に化けたゼウスが、美少年ガニメデを攫ったのは神々が持つ杯にそれを注がせるためだった。古代ギリシャとローマでは、水割りネクターが高貴な人の飲み方で、原液の葡萄酒は飲んだくれが粗野な人間が飲むものだった。当時の葡萄酒は、水割りにしないとアルコール度が高すぎ、しかも不味く、飲めたシロモノではなかったという。



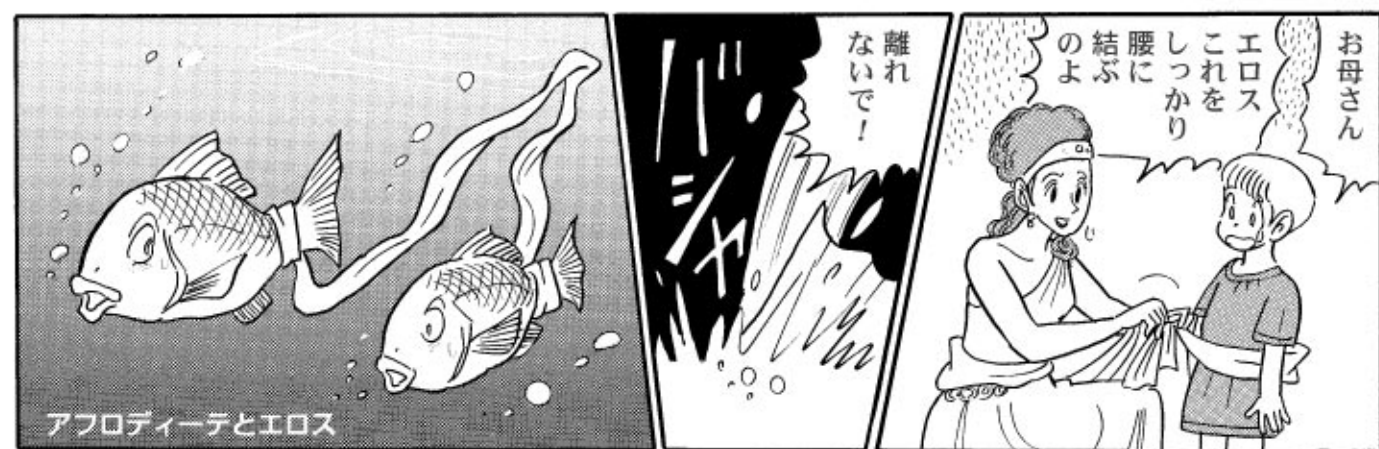
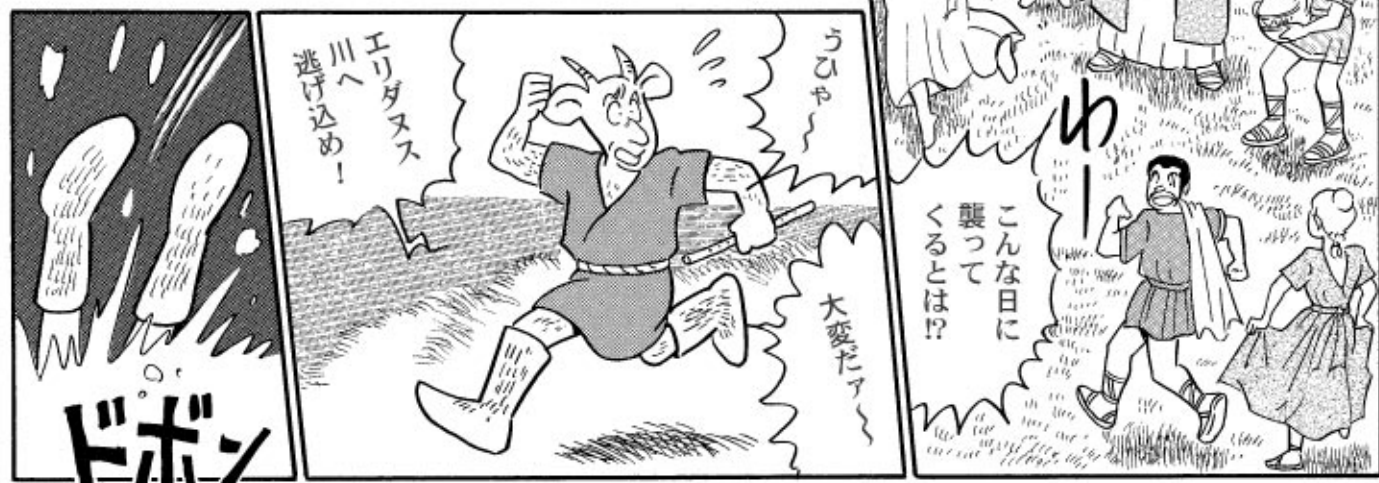
正調ギリシア神話では
わし座、みずがめ座

ゼウスはトロイの美しい王子ガニメデを、鷲に変身してさらい、神々の宴の席で酒をつぐ役割を与えた。宴にはゼウスの妻ヘラや伝令の神ヘルメス、愛と美の女神アフロディーテとその息子のエロス、森と羊飼いの神パーンなど多くの神々が参加していた。彼らはガニメデの美しさを褒め称え、ゼウスは彼に永遠の美貌と若さを約束した。ガニメデの姿はみずがめ座となり、ゼウスの変身した鷲の姿はわし座となったという。



No. 038
金井三男のこだわり星座神話
雨の恵みをもたらす星座

みずがめ座はエジプトでは重要な意味を持つ星座だった。太陽がこの星座に侵入する頃、雨季になったからである。砂漠のような乾燥地帯での雨季（エジプトでは12～1月）は、日本のような温暖湿潤な地域とはまったく異なり、みずがめ座は恵みの川・ナイルの女神のしるしとされたほど重要視されるに至ったのである。だが、占星術に伴ってこの星座がエジプトとは気候が異なるギリシャに伝播された時、雨季との関係は絶たれた。



No. 040
金井三男のこだわり星座神話
神々の変身の術

テュフォン来襲時、慌てて変身したのはパーンばかりでない。伝令の神ヘルメスはトキ（馬だったとも言われる）に、太陽神アポロンは大カラスに、月の女神アルテミスは猫に変身した。大カラスは、エジプトの太陽神ラーの象徴だったハヤブサと混同されたり、トキや猫がエジプトで神聖視されていた動物であることと合わせて、エジプトからの何らかの影響が考えられそうだ。エリダヌス川はナイル川と同一視されることもある。



No. 039
金井三男のこだわり星座神話
火山怪獣テュフォン

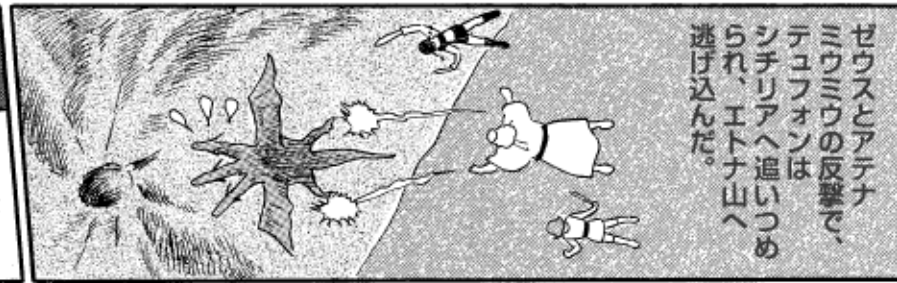
テュフォンについてヘシオドスは、次のように表現している。「肩から百本の蛇と竜の首が生え、黒い舌をチョロチョロと出し、両目からは火を噴く。腕力も極端に強く、表現すら難しいヘンテコなノイズを発して突進してくる」。日本産怪獣ならキングギドラに近い容姿だろうか。生まれは地中。大地が割れて誕生してきた。テュフォンからは血が流れ出ていたといい、これを溶岩流とすれば、テュフォン=火山爆発と考えると良さそうだ。

※テュフォンについてはコラムNo.039に詳しいが、人に害を及ぼす風の父でもあり、台風 (typhoon) の語源になった。エキドナと交わり、ヒドラやケルベロス (No.100) などいくつもの怪物を子孫に持つ。



ゼウス様

よし、火口をふさごう



ゼウスとアテナミウミウの反撃で、テュフォンはシチリアへ追いつめられ、エトナ山へ逃げ込んだ。



正調ギリシア神話では
うお座、みなみのうお座、やぎ座、エリダヌス座

オリンポスの神々がエリダヌス川のほとりで宴会をしていると、ガイアの生み出した怪物テュフォンが襲ってきた。アフロディーテとエロスは魚 (うお座)、アポロンはカラス、アルテミスは猫、ヘラは牛、バーンは山羊 (やぎ座) など、動物に変身して逃げまどった。アテナとゼウスはテュフォンと戦い、シチリア島のエトナ山に追いつめる。ゼウスは神々の慌てぶりがおもしろかったので、変身した姿のまま、いくつかを星座にしたという。



ここはわしらも引こう
こいガニメデヘラも逃げよ



ゼウス

ヘラ



あつ！アテナ様！

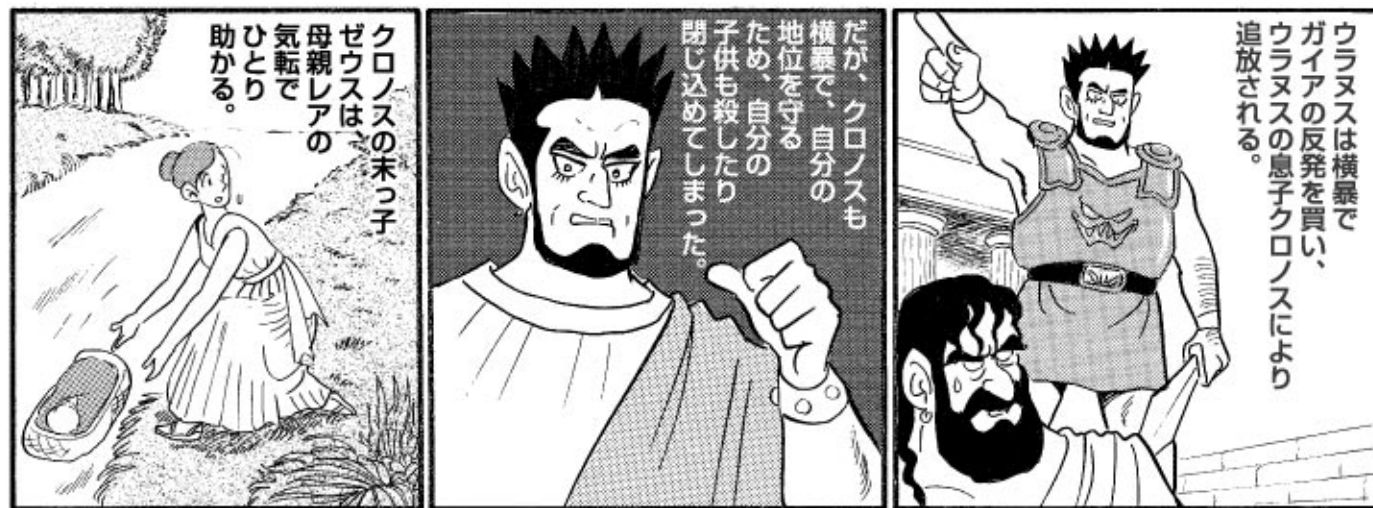
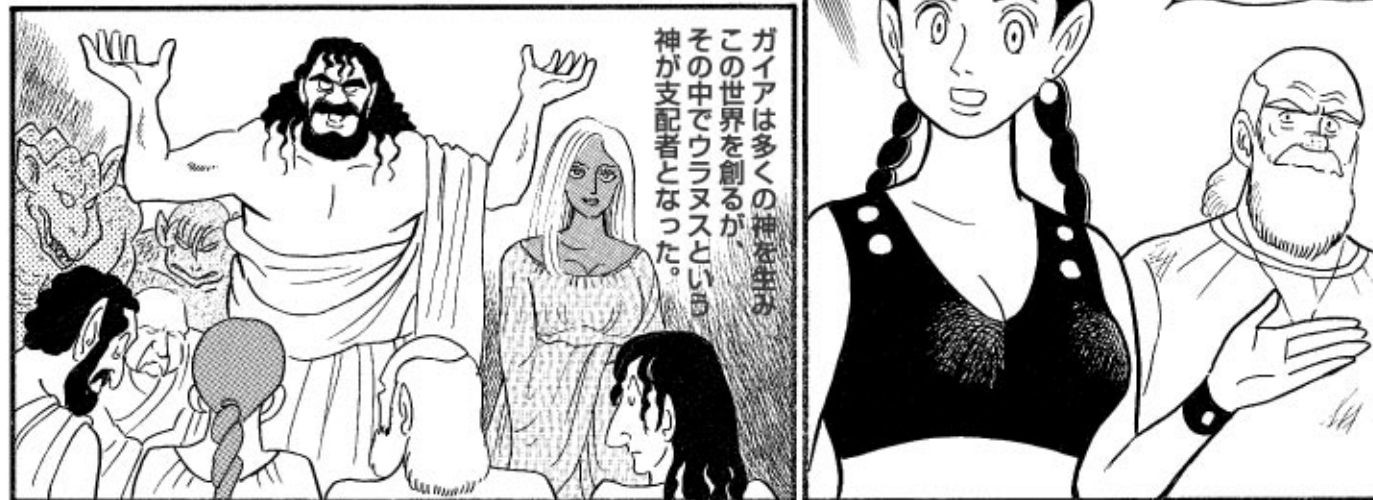
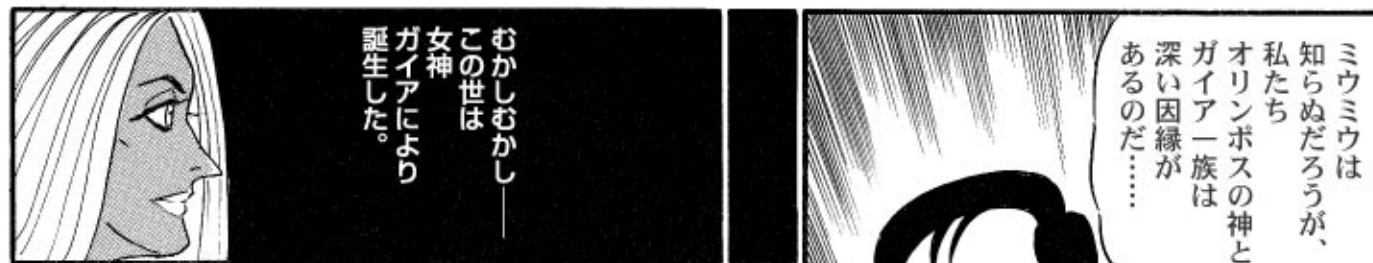


この化け物めくらえ！

危ないミウミウ

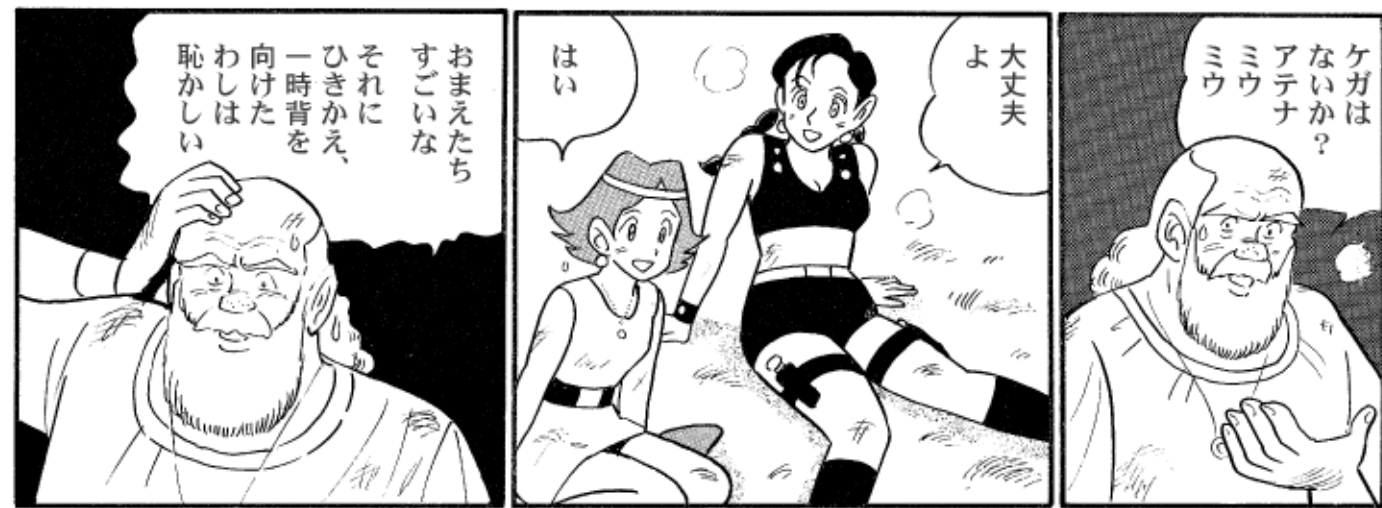
No.041
金井三男のこだわり星座神話
宴会場となったエリダヌス川

オリオン座の南西端から南に向けて流れるエリダヌス川が、実在のどの川をモデルにしたかについて三説が提案されている。欧州大陸を取り巻く大海に注ぐ仮想の川 (ギリシア初期の神話記者説)、エジプトを南北に流れるナイル川が同星座の輝星アケルナルを通り同じく南北に流れる天上の川に続く (エラトステネスやヒギヌス説)、イタリアのポー川 (後期のギリシア人) など。なお、ギリシアでは天の川を「川」とは見ず「道」と考えた。



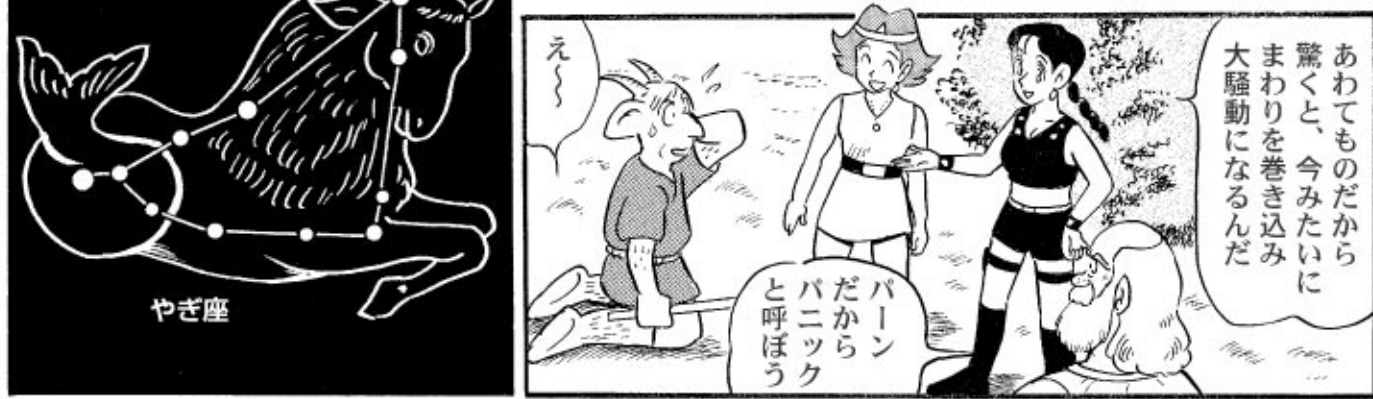
No. 043
金井三男のこだわり星座神話
季節を分かつ重要なポイント

神話時代には、おひつじ座に春分点・かに座に夏至点・てんびん座に秋分点・やぎ座に冬至点という科学的に大事なポイントがあった。春分点は羊の放牧開始を、夏至点は蟹の横歩きから太陽がこれ以上北に行かないことを、秋分点は天秤をシンボライズして昼夜平分を、冬至点は山羊の崖登りを太陽が北へよじ登ることになぞらえて創られたという説がある。当否は別として、暦を重視する一考に値する星座起源説だと言えるだろう。



No. 042
金井三男のこだわり星座神話
やぎ座の起源はイラク

やぎ座はギリシャでつくられたものでなく、現在のイラク付近に住んでいたシュメール人が、その後同じ地域に建国したバビロニア人が創作したもの。古代シュメール語では、スフル・マーシュ・ハと呼ばれた。羊魚がその意味だ。当時、太陽がこの星座に進入する冬至の頃、同地域で雨季が始まることと関連づけられたもの。雨季とは関係ないギリシャでは、意味は転じてアイゴケロス（大きな角を持つ羊）と呼ばれ、魚の意味は薄れた。



正調ギリシア神話では
オリボスの神々と
ティタン神の戦い

宇宙のはじめ、女神ガイア（大地）が誕生。ガイアとともに様々な神を作り出したウラヌスは、その後実権を奪われ、息子のクロノスが世界を支配する（ティタン神）。クロノスは自分の子どもを恐れ、次々と飲み込むが、一人だけ助かった末っ子のゼウスが、兄弟を助けクロノスと戦い勝利した（オリボスの神々）。ガイアは怪物テュフォンを産み、ゼウスらを襲わせたが、テュフォンはエトナ山に閉じ込められ、ガイアの野望は満えた。



No. 044
金井三男のこだわり星座神話
パンのパニック

やぎ座の学名は、Capricornus（カプリコーン）だが、これは、ラテン語でカベル（山羊）とコルヌ（角）の合成語。ギリシア語のアイゴケロスもほとんど同じ意味で、星座図でもひと目で羊と区別ができるほどの大きな角が目印となっている。恐慌とか錯乱とかの意味を持つ英語のパニックは、テュフォン襲撃時の牧羊パンの慌てぶりから出た言葉で、やぎ座の学名のカプリコーンは、音楽用語カプリッチョ（狂詩曲）の語源にもなった。

